

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720165

研究課題名(和文)『藝文類聚』・『初学記』による『白氏六帖』増纂部分の解明

研究課題名(英文)A study about reedition of the Baishi Liutie with the Yiwen Leiju and the Chuxueji

研究代表者

大淵 貴之(OBUCHI, Takayuki)

鹿児島大学・教育学部・講師

研究者番号：40614764

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国古典文学、中国史学及び日本古典文学の研究に利用される唐代類書『白氏六帖』に後世の改編による増纂部分が存在することを発見し論証した。

当初予定した条文対照はごく一部の事例研究に止まったが、研究過程で発見した『白氏六帖』に潜在する対偶表現、『白氏六帖』諸本の伝世過程に関する再考察の必要性、以上の2点は、当初の研究目的を達成するためにもより重要な新たな課題設定につながった。

研究成果の概要(英文)：This study discovered a new fact that there is some text reedited in later period in the Baishi Liutie, one of the encyclopaedias (leishu) compiled in the Tang dynasty. This study also focused attention on unknown antitheses and necessity of reconsideration about process of text's transmission.

研究分野：中国古典文学

キーワード：唐代 類書 『白氏六帖』 『藝文類聚』 『初学記』

1. 研究開始当初の背景

類書とは数多の書籍より、要点や名句を抄録したものである。採録される文献・語句は、「天、地、日、月、……鳥、獸、草木、雜果」(『白氏六帖事類集』より)といった具合に、事物ごとの部立てに分類される。森羅万象の情報を、秩序づけつつ包括的に収載する書であり、三国魏(3世紀)以降、主だった王朝に於いて、皇帝の文徳の象徴として勅撰された。今日に於いては、各時代の類書に佚文が多数含まれることから、文献資料の引用元として不可欠の資料であるほか、事典としても中国学を始めとした諸研究に盛んに利用されている。その一方で、類書そのものに対する研究は歴史が浅く数も少ない。研究開始当初は、ようやく類書研究の高まりが兆し始めた段階にあった。

具体的には、中国に於いては、張滌華『類書流別』(商務印書館、1943年)に始まり、胡道静『中国古代的類書』(中華書局、1982年)に於いて研究の第一歩が踏み固められたが、その後研究は停滞し、周生杰『《太平御覽》研究』(巴蜀書社、2008年)や郭醒『《藝文類聚》研究』(遼海出版社、2010年)といった专著が世に問われ、ようやく類書研究の高まりが見え始めていた。

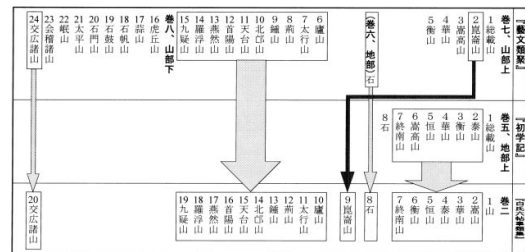
日本国内に於ける情況も同様である。過去には、柘尾武「類書の研究序説(1)-(3)」(『成城国文学論集』10-12、1978-1980年)や科学研究費助成事業における、加地伸行(研究代表)『類書の総合的研究』(平成6・7年度科学研究費補助金研究成果報告書、1996年)等の数種の総合的研究を始め、その他個別の類書に関する研究が時折見られることはあったが、決して中国学に於いて広く認知された研究領域ではなかった。その後の池田昌廣『『日本書紀』と六朝の類書』(『日本中国学会報』第59集、2007年)や、類書テキストに基づいた成語誕生の機序を論じつつ、類書の性質や受容史等について広く紹介した专著、湯浅邦弘『故事成語の誕生と変容』(角川叢書、2010年)といった類書に関する論著の相次ぐ発表は、我が国に於いても類書研究の必要性・重要性が広く認知され始めたことの反映でもあった。

書物の体裁上、類書が編纂者及び編纂時代の知的枠組みや、世界観・文学観等の解明に有用な研究対象であることは夙に指摘されていた。また、我が国に於ける文学活動(詩賦作品創作の他、歴史書の著述や実用文の作成を含む)に影響を及ぼしたものであることも、早くより論じられている。このように、研究の有用性や意義が説かれつつも、前進を見せなかった類書研究が、日中両国において本格的に始動する機運を見せ始めた時期に本研究は始まった。

報告者は、本研究開始以前より、類書研究をテーマとして従前に7篇の論文を発表していた。特に、本研究が対象とした『白氏六帖』(9世紀半ば成立)と同じ唐代類書につい

て、『藝文類聚』(7世紀前葉)を中心に、『群書治要』(7世紀前葉)や『初学記』(8世紀前葉)を用いた研究を行っていた。このうち、『藝文類聚』所収のテキストに対する調査を進める課程で、『白氏六帖』に、編纂時より時を隔てた後世に至り、『藝文類聚』や『初学記』のテキストが大量に移入されたと推定できる徴候を見出ししていた。それは、部立て内に於ける条文単位の増補といった程度を遥かに超え、部立てそのものの増補といった、類書の基本構造にも変更を加える改編であったと想定したのである。

報告者は、事前の予備的調査によって、例えば巻2の山に関する部立てに於いて、以下に示すような部立ての増補が存在することを捕捉していた。最下段の『白氏六帖』の20の部立てのうち、枠囲みした計19の部立てが、上段『藝文類聚』や中段『初学記』からの増補であると考えられたのである。



『白氏六帖』は、唐代を代表する文人、白居易の原撰にかかる。平安朝以来、我が国に於ける白居易の文学的地位は高い。ゆえに白居易研究の一環として、該書に対する専論も他の諸類書研究に比べれば、その数は多い。津田潔「新楽府と白氏六帖(稿)上」(『漢文学会会報』28号、1982年)を始め、白居易作品の理解に『白氏六帖』を積極的に利用すべきとの主張も再三提起されてきた。しかし、この種の研究も現行の『白氏六帖』テキストが、確かに白居易原撰の姿を留めるものであることが担保されなければ、為し得ない。花房英樹「白氏六帖に就いて」(『漢文学紀要』第3冊、広島文理科大学漢文学会、1949年)、山崎誠「白氏六帖考」(『白居易研究年報』第2号、勉誠社、1993年)等、現行テキストに条文増補が見えるとの指摘は縷々見られたが、上掲表の如き部立てそのものの増補、改編について指摘した論考は未だ存しない状況であった。

2. 研究の目的

上述の研究の学術的背景を踏まえ、本研究は以下の諸点を解明することを目的として始まった。

(1) 『白氏六帖』の現存諸本(『白氏六帖事類集』『新雕白氏六帖事類集添注出経』)を対校して定本を作成し(該書の整理本・点校本は日中両国に於いて未刊)、テキストデータベースとして公開する。

(2) 定本『白氏六帖』のテキストと『藝文類聚』・『初学記』両書のテキストとを逐一突き比べ、原書『白氏六帖』に対し、後世増補された条文、部立てを解明する。

(3) 改編が加えられた時期や改編作業の具体的様態について考察し、類書テキストの伝存過程や類書出版の一斑を解明する。

以上、本研究は、従来多分野の研究に利用され、また白居易の文学的特色の研究に利用すべきと提唱されてきた『白氏六帖』について、そのテキストが無批判に利用されている現状に注意を喚起し、真に白居易の編修を伝える部分を解明することで、諸研究の実効性を担保する最も基礎的かつ必要不可欠の研究となることを目的とした。この点に最大の特色と獨創性がある。

また、常用の工具書でありながら、未だ存在しない定本を作成することにより、中国学及び白居易文学の影響を受ける我が国文学の研究にも有益な研究材料を提供できる点で、大きな意義を有するものと考えた。

3. 研究の方法

本研究の目的達成のため、以下の方法を用いた。

(1) 『白氏六帖』諸版本の調査と対校作業

南宋刊『白氏六帖事類集』(天理図書館蔵本)と北宋刊『白氏六帖事類集』(静嘉堂文庫蔵本)との対校作業

台湾・国家図書館所蔵『新雕白氏六帖事類集添注出経』の閲覧調査

北京・国家図書館所蔵『新雕白氏六帖事類集添注出経』(残本)の現地調査

(2) 『白氏六帖』と『藝文類聚』・『初学記』との対照作業

(3) 『白氏六帖』所収の出典不詳の対偶と判を始めとする白居易文中に見える対偶との対照調査

(4) 学会発表、及び著書、論文の刊行による研究成果の公開

4. 研究成果

本研究の最大の成果は、『白氏六帖』の原型を考察するための新たな視点と研究手法を構築し、広く学会に提起したことにある。ここに言う原型とは、一つには後世に於ける増補部分を補足、除外することで接近可能となる編纂当初の本文(テキスト)の姿であり、また一つには原撰者白居易及び唐宋期の利用者にとって該書が如何なる書として捉えられていたかという、本書の本来の用途、性

質のことを指して言う。

本研究は、開始以前の予備的調査で得られた成果への期待に基づき、上述の前者について、その全体像を把握することを当初の目的とした。3年の研究期間中に、予定された『白氏六帖』全体に対する悉皆調査、並びに調査の前段階に予定された『白氏六帖』の諸本対校を終えられなかった点には忸怩たる思いがある。しかし、その一方で、『白氏六帖』巻二、山部の門目を中心に丹念な事例研究を行ない、『藝文類聚』及び『白氏六帖』を用いた、条文、更には部立てそのものの増補について、その具体的様態と改編が行われた時期、目的等について、またその研究手法の詳細について、単著『唐代勅撰類書初探』中の一編(第6章)として公開した。従来、後世に於ける増補、改編等、本文上の問題点がほとんど意識されることのなかった『白氏六帖』について、その存在や考究の手法を明確に提示できたことは、『白氏六帖』を利用する中国学並びに国文学の研究に対し、大きなインパクトを持つものと考えられる。

また、原初の本文考究に関連して、台湾の国家図書館に於ける『新雕白氏六帖事類集添注出経』の閲覧調査を通じ、『白氏六帖』諸本の系統について再考察すべき余地があることを発見し、第265回中国文藝座談会に於いて、考察の一端を報告した。この点については、次に述べる新たな課題の発見とも関連することであり、今後、引き続き研究を進めたい。

後者すなわち『白氏六帖』の本来の用途、性質に関する新たな仮説の創出及び考察手法の提起は、当初計画した『白氏六帖』と『藝文類聚』・『初学記』との条文対照作業を進める中で検出された来歴不明の収載対偶を、その端緒とする。『白氏六帖』のほぼ全篇にわたって収載されるこれらの対偶については、版本上の体裁の不統一もあり、従来その存在が看過されてきた。報告者にとっても研究開始当初には全く予期しない発見であった。本研究の最大の目的は、『白氏六帖』の原型考察にある。従来未知であった収載対偶の来歴について解明の端緒をつかむことは、目的に於いて、『藝文類聚』・『初学記』からの増入箇所を『白氏六帖』全体について明確化していくことと同程度に重要かつ学術的意義を持つもの判断し、究明に取り組んだ。

その結果、問題となる対偶は、白居易が判を作成する過程で創作した草稿段階のものである可能性を見出した。判とは、司法、行政の実務、或いは倫理、経義上の諸問題についての判断を示した文章を言う。『白氏六帖』収載の対偶群が、想定通りに白居易の草稿であるならば、『白氏六帖』成立に関する唐宣宗勅輯説の根拠資料『政事要略』所収「白居易伝」の記述に符合する点で、同説の証左となり、『白氏六帖』の成書過程解明に寄与するのみならず、白居易の佚文発見にもつながる点で大きなインパクトを持つ。この点につ

いては、日本中国学会第 65 回大会に於ける口頭発表を経て、単著『唐代勅撰類書初探』中の一編（第 7 章）として纏め上げ、研究成果を広く斯界に問うた。また、収載対偶と実用文である判との関連を契機に『白氏六帖』全体の部立て構成を再評価することで、該書が詩人白居易の詩作のための参考資料と捉えられてきた従来の通念に対し更改を迫り、該書は本来、官僚白居易の実務必携とでも言うべき性質を持つものであるとの仮説を提起し、論文「『白氏六帖』の特質」として学術雑誌に公開した。この点については、現存する『白氏六帖』諸本の系統に関する問題とも関わり、対偶収載についてのより詳細な調査、研究という次の新たな課題設定へとつながった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

大淵貴之「『白氏六帖』の特質」

『中国文学論集』43 号 九州大学中国文学会，2014 年，pp.95-104，査読無し。

本論文を公開する機関リポジトリのアドレス：

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1498243/p095.pdf>

大淵貴之著；簡亦精譯「『藝文類聚』編纂考」

『日本中国史研究年刊』Vol.2010 年度，上海古籍出版社，2013 年，pp.54-76，査読有り。

大淵貴之「幕府將軍徳川吉宗所見『図書集成』考」

『“東亜文明視野下的中国文学”国際博士生論壇論文集』下巻，中国・南京大学，2012 年，pp.743-747，査読有り。

〔学会発表〕(計 3 件)

大淵貴之「『白氏六帖』と白居易の文」

日本中国学会第 65 回大会

2013 年 10 月 12 日

秋田大学（秋田県・秋田市）

大淵貴之「台湾国家図書館所蔵『新雕白氏六帖事類添注出経』について」

第 265 回中国文藝座談会

2013 年 3 月 2 日

九州大学（福岡県・福岡市）

大淵貴之「幕府將軍徳川吉宗所見『図書集成』考」

“東亜文明視野下的中国文学”国際博士生論壇

2012 年 10 月 14 日

南京市（中華人民共和国）

〔図書〕(計 1 件)

大淵貴之，研文出版

『唐代勅撰類書初探』2014 年，230 頁

〔産業財産権〕

該当無し。

〔その他〕

該当無し。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大淵 貴之 (OBUCHI Takayuki)

鹿児島大学・教育学部・講師

研究者番号：40614764

(2) 研究分担者

該当無し。

(3) 連携研究者

該当無し。